

4

明治24年濃尾地震における
東京慈恵医院の救護・看護活動平尾真智子¹⁾, 芳賀佐和子¹⁾, 蝦名 總子²⁾¹⁾東京慈恵会医科大学医学部看護学科, ²⁾慈恵看護専門学校

1. はじめに

明治24年の濃尾地震は、マグニチュード8.4の規模で、愛知・岐阜両県に大きな被害をもたらした。濃尾地震は、明治以降の近代日本が遭遇した初めての巨大地震であり、日本における地震防災の出発点となった災害である。震災による負傷者の救護に近代的な医療・看護教育を受けた医療者が救護活動を行った。本研究では東京慈恵医院の救護活動のうち、看護婦の活動とその意義について報告する。

2. 研究方法

史資料として『東京慈恵医院第五報告(明治21~24年)』、東京慈恵医院出張所仮病室・看護班の写真、『恵和会報』(東京慈恵医院看護婦教育所同窓会誌)、『慈恵看護教育百年史』、『明治24年岐阜県震災誌』(岐阜県)、『写真でみる濃尾震災』(岐阜新聞社)、『岐阜県立医科大学付属病院八十年史』を用いた。

3. 結果および考察

明治24年10月28日6時38分頃、濃尾地方を襲った大地震は、愛知・岐阜両県に家屋の破壊、火災などの被害をもたらした。死者は7,273人、負傷者は21,183人にもなった。震災直後、負傷者が溢れ出し、救護・治療に人員が不足し県は医療者の派遣を各地に要請した。宮内庁侍医、日赤、慈恵、帝大、公立・私立病院、医師会、開業医、学校関係者などが救援にかけつけ、その総数は約37団体300余名となった。

明治24年11月2日、皇后陛下より、東京慈恵医院に愛知岐阜県下震災患者の救護のため出張のご沙汰があった。医院では即刻準備のうえ、薬品その他治療必要物品を携帯し、同夜、村瀬三英他4名の医師と看護婦、山田イツ、児玉ケイ、中島セン、小倉竹代、鈴木貞、野田カネ、白井ミキ、橋村延代、袖山キヨ、岩瀬香の10名が出張し、翌日被災地についた。看護婦の岩瀬香によると、愛知県下祖父江村では1ヶ村全滅のため、仮治療所は垣根とムシロだけ、宿泊所はわら小屋であり、井戸は1ヶ所もなく、水は隣村より貰い受け、負傷者は長持やたらいに入れられて運び込まれた、という。

11月7日、高木兼寛院長は岐阜県書記官より、看護婦4、5名を直ちに指し向かわせてほしい旨の電報を受け取り、これに対して同夜9時50分、新橋発の汽車で、医員益田敏、看護婦の原マサ、牧野マサ、松井トラ、田島ヒデ、山田イツ、高部マツの6名を出発させた。以後18日には看護婦の島キン、高橋トキ、三宅ギンの3名を、22日には薬剤師村松恵作、八木マサを派遣し、派遣された看護婦の総数は20名となった。派遣先は奥村、近ノ江村、起村などであった。負傷者は打撲による創傷、骨折、刺傷、消化器病、眼病が多かった。高木院長も視察のため、19日に出發し、岐阜県後藤敬臣病院長らと協議の結果、義捐金や医薬品、医員看護婦の食料・旅費、患者や医薬品の運搬費、医員看護婦の派遣は12月20日までとすることなどが取り決められた。しかし岐阜県知事より、後任の看護婦がいないため、帰京猶予の願いが出され、島キン、田島ヒデ、山田イツ、白井キミ、高部マツの5名が引き続き滞在し、翌明治25年1月14日に帰京した。

東京慈恵医院による看護婦派遣数は救護団体中最も多い20名であり、派遣された看護婦たちは日本で最初に近代的な看護婦を訓練した東京慈恵医院看護婦教育所の卒業生たちであった。これらの訓練を受けたトレインドナースによる救護活動は現地にも影響を与え、震災後、岐阜県立病院の看護婦養成の契機ともなっている。また被災地に派遣されたのは医師・薬剤師・看護婦で、チームによる医療が行われた。さらに東京慈恵医院では看護婦取締の鈴木キクが震災孤児3名の養育を行い、一名は看護婦となっている。